第３章

情報と社会（地球市民学）

第１節　前期「多文化コミュニケーション学」

佐　光　美　穂・長　瀬　加代子
仲　田　恵　子

【抄録】 多文化社会で円滑なコミュニケーションを図れるようになることを目標とした。そのために、授業を三期に分けて組み立てた。まずコミュニケーションを構成する諸要素を学んだ。その後、留学生とのディスカッションで実践する機会を設けた。夏休みに異文化体験をレポートに課し、各自の体験を振り返って学習のまとめとした。

【キーワード】 多文化社会　異文化理解　コミュニケーション　言語的コミュニケーション　非言語的コミュニケーション　異文化適応力

１．目標と授業形態

本授業の目標は多文化社会で円滑なコミュニケーションを図れるようになることである。しかし、多文化社会を身近に意識できない生徒も多いため、生徒に向けては「自分を知る、他を知る、コミュニケーションの質を高める」という目標を掲げ、日常的なコミュニケーションの分析や理解から多文化交流の実践へと接続する授業展開にした。

今年度はコース終盤の発表活動以外は、１クラスを授業単位にし、３名の教員によるTTで展開した。ＴＴという条件を鑑み、なるべくワークショップ形式になるよう、授業内容を工夫した。また、名古屋大学教育学部の高井次郎教授、国際交流センターの岩城奈己教授を招き、文化理解の方法や、日本人の英語学習に関わる問題について、専門的な見地から講義を受けた。

２．授業内容

⑴文化・コミュニケーションについての学習

初回から６回目までがここに該当する。

最初に、「文化」がどのように定義されるかを本校の教員から提示し、文化が物質的なものと精神的なものに分けられることを学んだ。その後生徒に実例を挙げさせ、「文化」の範疇に様々なものが含まれうることをグループワークを通して学んだ。

前述の高井教授から、文化を分析するためのいくつかの切り口や、言語コミュニケーションを構成する諸要素を中心とする二回連続の講義を受けた。また、言語的コミュニケーションを阻害する要因として、日本人の英語不安について、岩城教授の特別授業を受けた。授業内では自分の不安を測る心理テストを受けることができた。専門家二名の講義を受け、最後に本校教員が、言語コミュニケーションと非言語コミュニケーション、異文化適応/不適応の対処法について授業を行った。

⑵多文化交流の実践

第８回から10回までの内容がここに該当し、コースの後半の内容となる。これまで理解した異文化理解やコミュニケーションについての知識を実践に移す場として、名古屋大学の留学生５名を招いた討論会を設定した。留学生の出身国は、韓国、中国、ラオス、ボリビア、タイである（６名招く予定だったが、当日の体調不良で１名キャンセルとなった）。

３時間の学習時間の内、最初の１時間は、ゲストの出身国について、グループ別に調査活動をした。その上で、ゲストが日本で暮らしてどのような点に驚いたり、違和感を覚えたかを想像させた。

２時間目が実際にゲストを招いての交流授業である。まず高校生は日本の文化について具体例を挙げ説明を行い、次に留学生への日本文化に対する感想や考え方をインタビューした。授業時間を前半と後半とに分け、１グループが２名の留学生と交流できるようにした。

３時間目は、インタビュー結果をまとめ、クラス全体に発表した。

夏休みには、異文化理解を体験し、そこで感じた感じを言語化するレポートを課した。「異文化」を、単純に海外の文化とするのではなく、異世代のもの、国内でも他地域のもの、左利きや妊婦体験のような身体に根ざす文化なども取り上げるべき対象とした。生徒には自分の心の中で起きたことを記述させ、自己分析をさせた。休み明けはこのレポートに基づいてプレゼンを行い、学んだ結果を共有した。

⑶異文化体験と自己認識を確かめる学習

日付	授業内容	中心テーマ
①４月16日	オリエンテーション　見える文化、見えない文化	文化
②４月23日	名古屋大学・高井次郎教授の講義　その１	異文化コミュニケーション
③４月30日 ④５月７日 ⑤５月21日	名古屋大学・高井次郎教授の講義　その２ 名古屋大学・岩城奈己教授の講義 本校教員による授業	言語的コミュニケーション 日本人の英語不安 日本と外国の言語慣習の違い
⑥５月28日	本校教員による授業　非言語的コミュニケーション	非言語的コミュニケーション
⑦６月４日	本校教員による授業　私の文化　あなたの文化	異文化適応力
⑧６月11日 ⑨７月２日 ⑩７月９日	留学生とのディスカッション　準備 留学生とのディスカッション ディスカッションのまとめ、プレゼンテーション	異文化コミュニケーションの実践
⑪７月16日 ⑫～⑮９月10～24日	異文化体験レポート作成に向けて 異文化体験レポート発表会	学習全体のまとめ

３．結果

授業はペアやグループでの活動を積極的に取り入れた。協力し合って活動する姿が見られ、生徒間のコミュニケーションスキルの高さが窺われた。また、一つ一つの活動に対し、深く掘り下げて考えることができる生徒も多数見られた。そのような生徒は、例えば、初回の「見える文化・見えない文化」での生徒の感想では、次のように学習を跡づけている。

・ピアスをしていたり入れ墨をしている人（外人）【引用者注。原文ママ】を見ると、ひいてしまうことがあるが、そのピアスの裏には、愛だったり、信念だったりの意味があったりする。それを知れると、友達になれる。見える文化だけではひいてしまうようなことでも、見えない文化を知ることで互いに間違った理解をしないですむ。見えない文化まで知るためには、先入観にとらわれずに近づこうとする意識が大切。

・見える文化の方が非常にわかりやすかったが、初心に立ち帰ってみると「何でこれを着るのか」「何でこの料理が生まれたのか」等々、見えない文化にも接する部分が多くあることを知った。今日の授業を通して、見えない文化があって、見える文化がはじめて成立する様に思えたので見えない文化について想像することが大切なのではないかと思った。

留学生とのディスカッションは、全体としては生徒たちが積極的に参加する姿が目立ったが、英語力の問題もあり、積極的な生徒と、そうでない生徒に分かれた。ただ、英語が得意でない生徒の中には、実物を用意して話しやすくなるよう工夫したり、実演や身振りを使ってコミュニケーションを取ることもあり、やはり意欲の方がコミュニケーションの質に大きな影響を与えることがよく分かる結果となった。

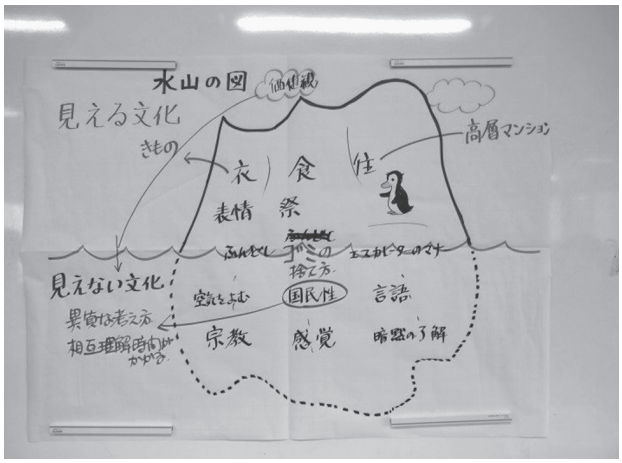

Figure 1　初回「見える文化・見えない文化」のグループワーク結果

Figure 2　留学生とのディスカッションの様子

夏休みの異文化体験レポートでは、自分の問題意識から課題を独自に設定し、実践することを求めたため、主体的な態度で取り組む生徒が多かった。その感想として、異文化を受け入れる大切さを述べるものがある一方、体験的に異文化理解の難しさを実感したというものもあった。総じて意欲的に取り組んだ生徒が多かった。

レポートのテーマ（異文化体験）例

・ラマダン体験
・左利き体験
・滝に打たれる修行体験
・食具を使わずに食事する体験
・ベジタリアン体験

４．今後の課題

今年度は大学の異文化コミュニケーション論で行っているような授業内容で実施した。そのため、高校の教員の立場では、自分自身が学問的なトレーニングを受けていない内容での授業実施となった。教員の自己研鑽が必要なことは言うまでもないが、どうやって授業の質を高めるかが大きな課題として残された。

次に留学生を招くことに関わる問題である。今回、名古屋大学の国際教育交流センターの仲介で、留学生を派遣していただいた。今年度は日本語力も高い留学生が多く、実りの多いディスカッションとなった。派遣要請をする際、どのような活動をするかを具体的に伝え、日本語力が高い留学生が必要なのかどうかなど明確に要望を出してコーディネートしてもらえたためである。それでも当日キャンセルなどの不測の事態は起きるし、こちらの要望通りの学生が集まるかなど、不確定要素が多いことは覚悟すべきだろう。　（文責　佐光美穂）